

# てこな・ミュージック・ジャーナル

## ショパン生誕200年 第3回 ~ショパンが経験した文明~

ショパンがパリに到着した1831年、時代は大きく変わろうとしていました。

交通では蒸気機関が発達して川に蒸気船が行き来するようになっていきます。セーヌ川に初めて蒸気船が就航したのは1816年ですが、ショパンがパリに到着した1831年には川輸送はさらに活発になり、セーヌ川は船の衝突事故が起こるほど、混みあっていたそうです。そしてすぐに鉄道の時代がやってきます。現在から考えると不思議なのですが、最初の鉄道は文字通り、2本のレールの上を馬が引く貨物車だったそうです。そのメリットはなんだったのでしょうか。恐らく、道としての確保と車両の安定、さらには輸送量といったところでしょうか。

### 階級社会は列車にも

蒸気機関によるフランスにおける最初の長距離鉄道は1842年、パリとルーアン100キロ、パリとオルレアン130キロの間に敷かれました。時速は40キロで、全体の長さは150メートルあったそうです。機関車が客車を20輛近くも引いていたとか。車輛は現在とは異なり、それぞれが外から出入りができる馬車型コンパートメントになっていました。一等、二等とあり、王族用から客車の上の屋根なし座席、さらには貨物用というように、やはり屋根がなく乗客を次々に乗せるすし詰め車輛もありました。列車にも階級社会が如実に見えるとはいえ、風雨にさらされる屋根なし車輛利用者も、特別車の王侯貴族も同じ時間に目的地に到着するので、夢のような移送手段の登場となったのです。

### ショパンが乗った交通機関

蒸気船は、1838年にスペイン、マヨルカ島を目指したときに、汽車は、死の前年となる1848年、イギリスでロンドンとエディンバラ間670キロ、さらにマンチェスターまではほぼ半分の距離を乗っています。12時間と8時間という長い旅ですが、乗り心地は悪くなかったのでしょうか。さしたる感想は残っていないからです。もともと、ショパンの関心は作品出版や住まいなど、音楽家としての仕事や生活環境のことばかりに向けられていて、異なる分野への関心はほとんど示されません。それにまだ多くの人々にとって馬車の時代だったからでしょう。同じ頃、文豪スタンダールは軽四輪馬車を所有すると羨望の眼差しを向けられる、と書いています。ショパンは1845年に小型四輪馬車を買って、生活をともにするサンドを感激させています。

市川市文化振興財団 音楽総合プロデューサー 小坂 裕子

### 活字文化

この時代、活字印刷が飛躍的に発達し、新聞や雑誌など、紙に載った情報が行きかうようになりました。先ほどのスタンダールが、パリのような大都市では新聞情報に人々が踊らされ、印刷されるものを鵜呑みにしていると批判しています。自分で判断するのを止めて、活字になった意見ばかりを信用するというのです。

サンドは、自らが新聞記事、あるいは新聞小説で世に出たというのに、はるか遠い地中海の島にショパンと滞在する目的の一つが、新聞がないところに行って、押し寄せてくるジャーナリスティックな情報を目にしなくてすむからだと書いています。情報社会に生きながら自ら切断するには勇気がある、遮断されてしまう場所に移動すれば、自己判断能力を取り戻せると、現代にも通用するかのような感想を述べています。

### 郵便事情

ショパンはマヨルカ島滞在中、郵便が来ないと嘆きました。ところで最初のポストがパリの街に登場したのはいつだったのでしょうか。それは17世紀半ばで、18世紀末になると郵便ポストの数は500以上になっていたそうですから、ショパンの時代、パリの中で手紙を出す苦労などまったくありませんでした。ですから島暮らしで、新聞がなくてせいせいしたと喜んで、仕事の成果をパリに送る必要がある2人は、配達人が信用できない上に、いつ来るとも分からない、そういう島の郵便事情に困り果てています。

### 屋敷の中にポスト

パリ生活に慣れ親しんだ人たちは、中部フランスのペリーにあるサンドの屋敷、通称「ノアンの館」に招かれると、さまざまな心遣いに感動しています。その中の1つが、館の「郵便事情」でした。部屋が並ぶ廊下に、郵便ポストをサンドは設置させていたのです。もちろん公のものではなく、客人のためのポストです。手紙文化の時代、ポストが館の中に設けられているのですから、誰もが驚き感激したのです。使用者が定時になるとまとめて郵便配達人に渡してくれる、というシステムでした。

### ショパン最後の手紙

ショパン絶筆の手紙のあて先は、親しいチェロ奏者のフランコムです。死のほぼ一ヶ月前、パリで居心地のいい南向きの部屋に移るので、冬に会えることを楽しみにしている、2、3日一緒にいられば嬉しい、といったことが書かれています。冬を待たずに最後の時は、1849年10月17日となりました。フランコムは数日前に駆けつけ、自分に贈られたチェロ・ソナタを、最愛の友との別れの音楽として演奏し始めました。